第７波における沖縄県医師会における発熱軽症者抗原検査センターの取り組み

副会長　田名　毅

【はじめに】

新型コロナウイルス感染症が発生、流行し3年近くが経過している。中でも2022年に起こった伝播力が強いオミクロン株による第７波は過去にない患者数を発生させた。そして家庭内感染が主な感染経路になってからは多くの医療従事者が罹患したために、コロナ患者の救急対応、入院対応を行ってきた旧重点医療機関において病棟閉鎖等による患者受け入れ制限が発生し、本感染症以外のこれまでであれば助かるはずの疾患が助けられないという事態になった（事実上「医療崩壊」といっても過言ではない状況であった）。

そのような中で当会は表題の検査センターを立ち上げて、土日・祝祭日の総合病院の救急外来に受診する発熱者を少しでも減らすべく取り組んだ。今回の取り組みの経過を報告したい。

【経過】

2022年７月12日、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの和氣亨院長より、発熱患者の救急外来受診の急増により熱中症の患者さんの対応が遅れ救命出来なかったという事態が発生したので病院に来て関係者から話を聴いて欲しいと連絡が入った。

院長室にて和氣院長、救急外来の先生方、感染症担当の先生から直接お話を聴いた。一刻の猶予もないと判断し、沖縄県医師会の担当課長と急ぎ相談した。同院の道を隔てて真向かいにある沖縄県医師会を会場とした発熱者に対応する仕組みを検討した結果、ドライブスルー方式で抗原定性検査を実施して、電話診療において結果を説明して陽性者にはHER-SYS登録と解熱剤配布、陰性者にはそのまま帰宅可能かどうか全身状態をチェックした上で解熱剤提供を行うという方法を考えた。尚、PCR検査の実施、保険診療も検討したが、いずれも準備に時間がかかると判断し迅速性を優先して、これらは今回行わなかった。

【実施方法】

(1) 実施場所：沖縄県医師会館が主会場
沖縄県薬剤師会
沖縄県小児保健協会
沖縄県歯科医師会
沖縄県看護協会の各駐車場

実施期間：2022年７月17日（日）～８月21日（日）までの土日・祝祭日
※７月30日から沖縄県の委託事業として実施

実施時間：17：00～21：00
（概ね３時間程度）

(2) 実施手順：

①事前準備

1) HER-SYS登録等の事務処理
医師会職員、那覇看護専門学校・沖縄県立看護大学の看護学生

2) 受付に必要なテーブル等の設置、車の道案内指標の設置、待機場所の確保

3) 来場者に使用する抗原定性検査キット、解熱剤等の準備、注意事項を書いた配布資料（陰性者、陽性者を区別して配布）

4) 来場者に対応するスタッフの感染対策に必要な資材の準備

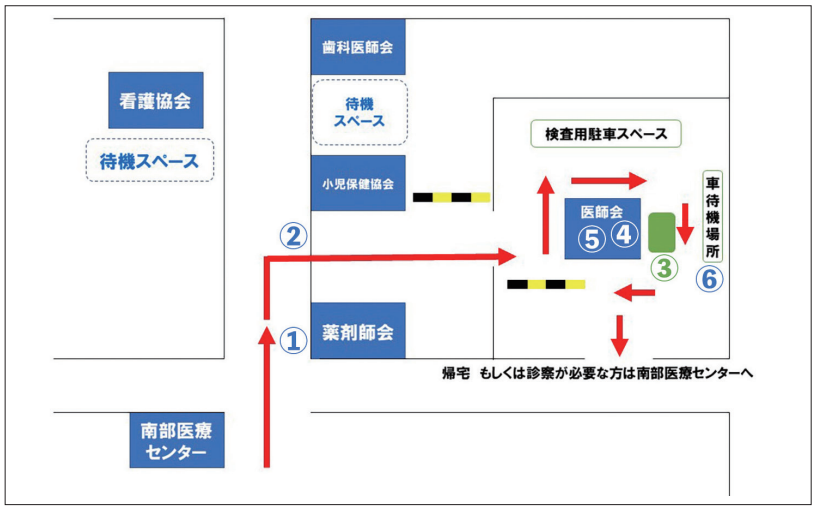

図１　沖縄県発熱軽症者抗原検査センター配置図

図２　検査の流れ

②実施の流れ

1）沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの救急外来入り口に病院職員を１名配置し、建物内に入る前に発熱者であること、軽症であること、新型コロナウイルス検査を希望することが確認できた場合、当センターに案内してもらうようにした。電話で同院に問い合わせがあった際も上記を確認して、当センターの予約電話番号を案内してもらった。那覇市内にある那覇市立病院、沖縄協同病院、沖縄赤十字病院、大浜第一病院の救急外来にも電話で相談があった際は当センターでの検査案内をしてもらった。
また、病院からの紹介件数が減りはじめた後半は沖縄県コロナ本部コールセンターにも上記の情報を提供し、電話予約を受け付けるようにした。

2）ドライブスルー入り口の受付で渡した「受付用紙」と「身分証明書」の写メを二つで来場者を受付（図１①②、図２①②）。

3）沖縄県小児科医会の先生方により、鼻咽頭ぬぐい液の採取を行っていただいた（図１③、図３③）。
※小児の場合、採取の際に抵抗するなどの難しさがあり、今回は小児科の先生方にお願いした。

4）沖縄県臨床検査技師会の方々に沖縄県医師会館入り口の風除室にて、抗原定性検査キットを用いて結果を判定いただいた（図１④、図３④）。

図３　検査の流れ

図４　検査の流れ

5）陽性の場合、医師会館内で待機している医師（内科医、外科医、小児科医）が電話で問診を行いHER-SYS登録の書類記載し、その後事務局にて発生届を実施。解熱剤希望があれば無料で提供。陰性の場合も医師より電話問診を行い、解熱剤の提供のみで帰宅可能か、もしくは沖縄県立南部医療センター・こども医療センターに紹介が必要かどうかを判断し対応（図１⑤⑥、図４⑤⑥）。

本事業の協力者は表１のとおりとなっている。

(3) センター実績

①来場者数（紹介機関別）図５

やはり隣接した沖縄県立南部医療センター・こども医療センターが68%と最も多かった。他の病院からの来場者は少なく、移動距離が影響していると考えられた。

しかし、取り組みの後半から情報提供したにも関わらず沖縄県コロナ対策本部コールセンターからの紹介が27%を占めた。

表１　沖縄県発熱軽症者抗原検査センター協力者一覧

	延べ人数	1日の稼働人数
内科・外科等医師	４人	２人
小児科医師	１３人	３人
臨床検査技師	１０人	２人
事務局	１６人	７人
警備係（駐車場）	３人	３人
アルバイト生※	１２人	１０人

※沖縄県立看護大学、那覇看護専門学校より看護学生が参加

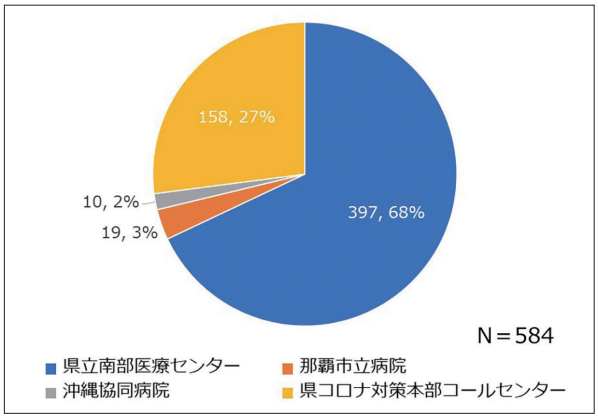

図５　来場者数（紹介機関別）

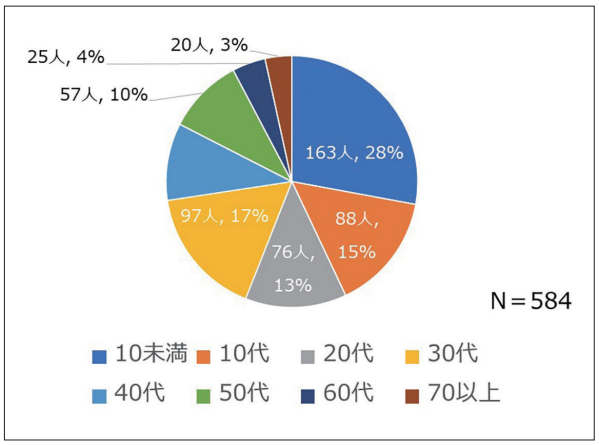

図６　年代別来場者数

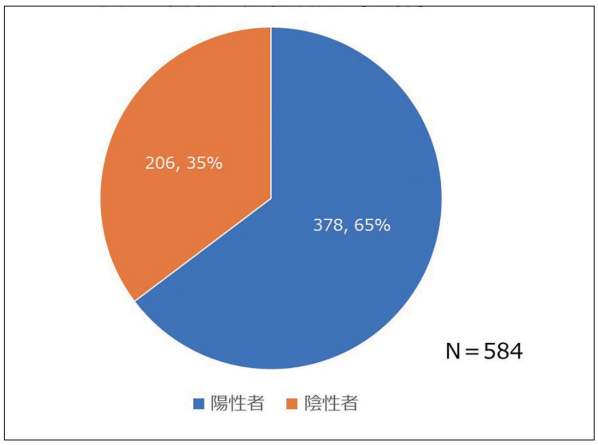

図７　陽性・陰性者数（全体）

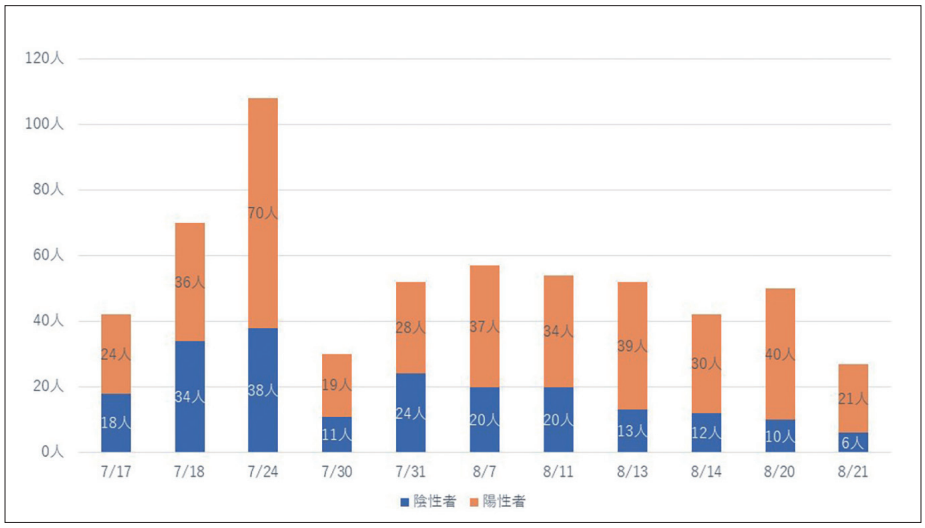

図８　日付別来場者（陽性・陰性者）数

②年代別来場者数　図６

10 才未満 28%、10 代 15% と未成年が 43% を占めた。他の年代には偏りはなかった。

③検査結果（陽性・陰性者数（全体）図７／日付別来場者数　図８）

全体の陽性率は 65% であった。日付別来場者は７月 24 日が 100 名を超えて最も多かった。その後は 50 名前後であった。陽性率に日付ごとの差はみられなかった。

④当センターから沖縄県立南部医療センター・こども医療センターへ紹介となった症例（表 2）

軽症者を来場の条件としていたが、電話問診でも食事が摂取出来ない、高熱が持続している、小児でクループ症状が考えられる症例が含まれていたため、そのような場合は沖縄県立南部医療センター・こども医療センターのトリアージ看護師に医師から直接電話し申し送りした上で紹介した。このような簡易検査センターを行う際に、これら症例のようにそのまま帰宅させられないと判断し、直接診察が必要な際に、バックアップする医療機関の存在も重要と考えられた。

(4) アルバイトで参加した看護学生の感想(図９)

コロナ禍において、看護学生の臨床実習先を探すことも苦慮することがあると聞いている。今回参加した看護学生の感想を読むと、社会・医療界がコロナ禍で大変な状況になっている中で、本センターの取り組みの意義を理解し積極的に参加してくれたことがうかがえた。

表２　南部医療センターへの紹介者

受検者数　５８４人
うち、南部医療センター紹介　９人　来場者数の1.5%
うち、中等症Ⅰ　５人　紹介者の55.6%

重症度	年齢	性別	検査	症状等
中等症Ⅰ	17歳	男	−	食事が取れない
中等症Ⅰ	61歳	男	＋	食欲低下、全身状態悪い
軽症	62歳	女	＋	水分が摂れない、尿量少ない
軽症	10歳	男	＋	水分少し、ぐったり、クループ症状ひどい、デカドロンの処方必要
軽症	85歳	男	＋	二世帯住宅の家族が陽性、パーキンソン病
軽症	10歳	男	−	尿、汗出ない
中等症Ⅰ	51歳	女	＋	カロナール飲んでも熱が下がらない、食欲無し、水分は取れている、昨年乳癌のオペ、タモキシフェン、抗うつ薬
中等症Ⅰ	33歳	男	＋	痰に血が混ざりだした、40度の熱が4日続いている
中等症Ⅰ	30歳	女	＋	僧帽弁逸脱不整脈、クリニックで失神、動悸、腰痛、食欲がない、水分は取れている、息苦しい

図９

以下三人の感想を抜粋して紹介する。

看護学生１：病院が逼迫状態になると医師会も協力するなどの沖縄の医療界のチームワークが強いなと感じました。実際に、臨時実習も行ったことがない私としては身近で医療従事者と関わることができた経験となったのでよかったと感じています。

看護学生２：今回の事業の目的である総合病院が二次、三次救急をスムーズに行うために一次救急にあたる発熱軽症者を当センターで請け負い、追加治療が必要な患者は総合病院に戻すといった患者のスクリーニングの面を持っていたと感じられました。

看護学生３：今回のアルバイトでは、コロナ禍で実習や現場に行くことができない中で病院ではないけどコロナの検査がどのように行われているのか現場の雰囲気がわかったことが良かった。

【考察】

コロナ禍で若い世代は発熱しても軽症で済むことが多いことから、発熱者もしくは家族によって抗原定性検査キットを利用して陽性が判明した際は医療機関に受診しなくてもHER-SYS登録が出来るシステムを確立するなど沖縄県、沖縄県医師会で共働し取り組んできた。しかし、今回の第七波では発熱者がこれまで以上に急増した結果、総合病院の救急外来に検査を求めて患者が殺到する事態になった。その中で冒頭紹介したように、普段なら助けられる患者が助けられなかったという事態が発生した。特に問題となったのは多くの医療機関が診療していない準夜帯、土曜日の午後、日曜日・祝日の時間帯への影響であった。

今回沖縄県医師会は土日の準夜帯にドライブスルー方式で簡易かつスピーディーに検査を行いながら、その結果は電話診療で対応し方針を決めるという方法を行った。このコロナ禍の3年の経験で私たち医療従事者が会得したのは電話診療でも最低限の全身状態の良し悪しは判断できるということではないであろうか。それを活かしたのが今回の方法であった。対面診療が必要と判断したときは、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターが快く引き受けてくれたので、そのバックアップ体制の基、安心して取り組むことが出来た。

今後、2023年はじめには第8波の発生が沖縄でも危惧されている。第7波の時に取り組んだように当会が行った本センター、また他の地区医師会では各地区医師会会員の協力を得てそれぞれの地域で臨時発熱外来、抗原検査センターの設置を、第8波が発生した際に迅速に立ち上げられるように現在話し合いをはじめている。非常時こそ、医師会のネットワークが活かされる時である。これからも新興流行感染症が発生した時に、我々医師会に何が出来るかを医師会会員皆で議論し対応出来ればと考えている。

最後になりましたが、今回の事業にご協力いただきました当会の涌波淳子理事、玉城研太朗理事、沖縄県小児科医会会長の浜端宏英会長をはじめとするご協力いただきました先生方、そして沖縄県臨床検査技師協会会長の手登根稔会長はじめとするご協力いただきました検査技師の皆様、誠にありがとうございました。この場をお借りして御礼申し上げます。

お知らせ

感染症情報

所管課よりお知らせ

※　新型コロナウイルス感染症関連の対応の為、当分の間週報の還元を休止させていただきます。申し訳ございませんが、ご了承の程よろしくお願い致します。

なお、沖縄県感染症情報センターでも沖縄県の感染症情報を更新しておりますのでご確認下さいますよう、宜しくお願い致します。

【 https://www.pref.okinawa.jp/site/hoken/eiken/kikaku/kansenjouhou/home.html 】